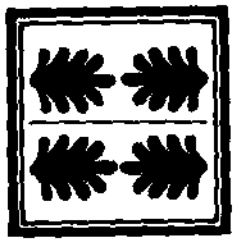
大いなる幻影

戸川昌子

講談社文庫



講談社文庫

大いなる幻影
戸川昌子
昭和53年8月15日第1刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京（03)945-1111(大代表)
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　豊国オフセット株式会社
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社千曲堂

© Masako Togawa 1978

Printed in Japan

0193-361099-2253(0)　240円
(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

講談社文庫

大いなる幻影

戸川昌子

講談社

目次

一　プロローグ（一九五一年四月一日）
――大塚仲町の交差点で――　七
二　三つの暗示　一〇
イ　目撃
ロ　名簿
ハ　新聞記事
三　東条管理人の独白（建物移動の瞬間）　一九
四　マスター・キー（建物移動六ヵ月前）
――管理人田村兼子の場合――　二七
五　マスター・キー（建物移動四ヵ月前）
――石山則子の場合――　四七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

六　マスター・キー（建物移動三ヵ月前）　九七
——木村よね子の場合——
七　東条管理人の記録（建物移動工事が終った数ヵ月後）　一七五
八　エピローグ（すべてと関係なく……）　一八八
解説　赤江　瀑　一九〇

大いなる幻影

一　プロローグ（一九五一年四月一日）

――大塚仲町の交差点で――

その日は、四月にはめずらしく前の晩降った雪が朝には一センチもつもっていた。が、昼まえには雲間からのぞいた暖い陽ざしでアッというまに溶け出し、街は再び春の陽気に舞い戻った。

ちょうど正午に、ひとりの女が信号が赤であったにもかかわらず、大塚仲町の交差点を横切ろうとしていた。赤い衿巻を頭からすっぽりとかぶり、黒いスキーズボンの上に分厚い冬のコートをはおっていた。街を歩く人達がポカポカとした陽気に汗ばみ始めていたというのに……

女が交差点を三分の一ほど渡り終えたとき、護国寺の方角から釘の木樽をいっぱい積んだ小型貨物（トラック）が交差点に向って疾走して来た。小型貨物（トラック）の若い運転手は、この時期はずれの雪に故郷の頬の赤い娘達を思い出し、口笛を吹きながら坂を登りきるためにアクセルを一杯ふみしめていた。交差点の青い信号（シグナル）も若者に走れ走れと呼びかけていた。交差点を走り抜ける直前に、若者の視界のはしを赤いスカーフの女が掠めていったが、それは先程まで頭の中に思い浮かべていた故郷の

人間にそっくりであった。つづいて若者の車が都電のレールで滑ってしまったのが、このためであるかどうかは分らない。ただ未熟な若者があわてて、ブレーキを踏んだ時、すでに直角に回転していた車は若者の意志をはなれて、なにものかの手に導かれたまま逆の方向、即ちその女へと真直ぐ走っていたのである。若者が目をつぶる前に見たのは、前面（フロント）ガラスにおおい被さってくる赤い衿巻に包まれ、驚愕に歪むその女の顔であった。

三分たって、百メートル離れた大塚仲町の消防署から白い救急車が駈けつけ、その事故の被害者をまた三分かけて近くのT大病院の分院へ運んだ。この間に女は三度口を動かして何事かを訴えようとしたが、その言葉は誰の耳にも聞き取ることは出来なかった。そして病院に着いたとき、女は死んでいた。

病院では、白い上っ張りの背の高い医者がその被害者の死を確認したあと、

「口紅をつけてはいるがね、このひとはおとこだよ。」

と痰のからまった無表情な声で、皆に云った。

立会った人達は、その医者の言葉に笑いを噛み殺せなくなってしまったので、ひとりの人間の死という厳粛な事実も一瞬頭の中を吹き抜け、ついでに事故死に立会ったという厭な気持も消えてしまった。

運命の直接の手先となった若者だけが不条理にも罰を受けた。若者はショックのため、開いた口が閉じなくなり、病院に入れられたあとも流れる涎と一緒にあかいすかーふとたどたどしく云うことしか出来なくなってしまったからである。

しばらくの間、
忙しい警察の刑事たちが、身元不明、三十歳位、女装のその（事故死体）の家族が名乗り出るのを待ち……
しばらくの間、
暇な駈け出しの警察廻りの記者が、上野の男娼の仲間に、その（事故死体）の写真を見せて歩き……
しばらくの間、
病院の医者や看護婦がお茶を飲みながら、その（事故死体）のことで冗談を云った後、皆は、女の服を着て大塚仲町の交差点で事故死したそのおかしな男のことを忘れてしまった。
一方、ひとりの女が部屋の明りもつけずに、男の帰るのを待っている。
大塚仲町の交差点から二停留所はなれた陰気な建物の五階の部屋の中で……
自分の赤い衿巻と黒いスキー・ズボンと冬のコートを着せて送り出した、肩を落し後を振り向きもせずに出て行ったその男の帰りを……
ひとりの女が七年の間、そして今日も待っている。
――その建物の名は〝K女子アパート〟と云う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二　三つの暗示

イ、目　撃

――男が交差点で死ぬ三日前――

男は二階の階段の途中で再度躓き転びそうになった。それで右手に下げた旅行鞄（トランク）がますます重たく感じられ、遂には三階の踊り場のところで持ち変えるために床におろさなければならなかった。彼は茶褐色に変色した牛皮のその大きな旅行鞄を眺め、その重量感を呪ったが、旅行鞄の中に存在しているそのものに就いては何の関心も示さなかった。そのことを考えるには、彼は余りにも追いつめられていたからである。彼が今、願っていることは、一刻も早くすべての終末が、つまり何もかもが終ってしまうことだけであった。数時間前から彼はすべてを放棄して逃げ出してしまいたいという思いに何度も駆られていた。が、その度に彼の思考は壁に突き当り、次には無限の闇が目の前に拡がってくるのだった。それは今更やめたところで結局同じことではないかという絶望感であった。

彼は踊り場の上で肩をピクリと震わせると、旅行鞄を持ち上げる前に、額の汗を手の甲でぬぐい、赤い衿巻でもう一度顔を注意深くおおった。すると衿巻から女の甘い匂いが漂い、彼になにか暖いものを感じさせたのだった。彼は元気をとり戻し旅行鞄を持ち上げると、膝にむごくつき当る旅行鞄の重さにもなんとか耐えながら階段をのぼって行った。階段の下の方で、時々足音と人声が聞こえていた。彼はますます足を早め、五階の階段を一気にのぼりつめると、廊下に人影の無いのを見さだめてからその部屋の扉を押した。

「入口で、管理人なんとも云わなかった。」

部屋で待っていた女が、男の旅行鞄をみつめながら尋ねた。

「新聞を読んでいた。こちらを見ようともしなかったよ。」

男は答え、低い上り框に旅行鞄を置いたが鞄は滑ってしまい、コンクリートのたたきの上で鈍い音をたてた。

「駄目じゃないの、そんな乱暴な置き方をして……」

女が大きな声を出した。

男は汗で手が滑ったことや、どんなに鞄が重かったかを説明しようとしたが、結局口の中で「どうせ同じなんだ」と呟いただけだった。女は男の手を借りずに旅行鞄を部屋の真中に移した。

「可哀そうに、早く出してやらなければ……」

男は畳の上にながながと寝そべり、女が「可哀そうに」と繰り返すのをぼんやり聞いていた。

女が留金をはずした。パチンと音がして旅行鞄の蓋が開き、中には子供がくの字型にうずくまっていた。女には、分厚い毛布にくるまったその子供がすやすやと眠っているように見えた。色素の全然混っていない柔い髪の毛は、光を吸いこんで金色に輝いていた。女は楽しそうに話しかけた。

「さあさあ、可哀想に、出してあげましょうね。こんな窮屈なところで、長いことお利巧さんに我慢してたのね。」

女は旅行鞄の中でじっとしている子供を、毛布ごと抱き上げようとして、口もとに絡まっている白いハンカチに気がついた。ハンカチには黒いしみがついていた。それは固まった血だった。暫くして女がポツリと云ったが、その声には先程までと違って空虚な響があった。

「死んでるのね。」

男が畳に手をついて上半身を起こした。

「仕方がなかったんだよ。結局そうするより仕方がなかったんだ。」

それから沈黙が部屋の中を支配し、男と女は旅行鞄の中の子供の屍骸をはさんで永いこと坐っていた。

*

十時間後に、男は再びその旅行鞄を下げて階段を降りて行った。今度は女が先に立ち、裸電燈にぼんやりと照らし出された真夜中の階段や左右の廊下に人影の無いのを確めていた。二人は音

を立てないように長い時間をかけ、空気のひんやりとする地下室に降り立った。そこはすでに何年もの間使用されていない二十畳敷ほどの大きなタイル張りの共同浴室であった。男は懐中電燈の光で、工事を中止したまま乱雑に放り出されているシャベルや鶴嘴（つるはし）、紙袋が破れて中身のこぼれているセメント袋、水垢やぼうふらの浮いた腐水の入っている木樽、隅に荒縄でくくって積んであるタイル等を順々に照らして行った。そして最後に、タイルの剝げた湯舟の底の真ん中の部分が一メートルほどポッカリと割れ目をつくっているのをじっとみつめていた。それは女の言った通り、丁度旅行鞄を縦にして埋められる深さだった。

男は女に懐中電燈を渡すと、隅に積んであったセメントの袋を一つ床におろし、スコップの先で破き始めた。紙袋の中のセメントは石塊のように固まっていたが、まわりの部分が割れるとサラサラと床に山を作ってこぼれ落ちた。男はまた、小さなブリキの罐で水を運ぶために、水道の蛇口まで何度も足を運ばなければならなかった。蛇口をひねる度に、水道管が恐しい音で震え、二人を絶望的な気持にさせた。しかし間もなくセメントは柔らかく流し込める程に捏ねあげられたのだった。女が旅行鞄の蓋を開いた。子供は顔の部分もすっかり毛布で包まれ、何も見えなかった。女は、男が溶かしたセメントをスコップですくっては鞄の中に流し込んだ。セメントが溢れると女が旅行鞄の蓋を閉じ、両手をその上に置いてゆっくりと云った。

「立派なお棺が出来たわね。」

「こうしておけば、永久に腐らないかも知れないよ。」

男が低い声で答えた。男の額は流れる汗で目もあいていられない程だったが、休む暇も無く湯

舟の底の割れ目に旅行鞄を運ばなければならなかった。女が懐のハンカチで男の額の汗を拭いてやった。それから二人で、セメントでひどく重さを増した旅行鞄を割れ目に運んで行った。割れ目の小さな石塊が邪魔だったので、男は風呂場にこもる打音に怯えながら、その石塊を鶴嘴の先で削り落さなければならなかった。旅行鞄が割れ目におさまったとき、男はへなへなと膝をついて湯舟の底にしゃがみこんでしまったが、まだ割れ目を埋める仕事が残っていたので、女が男をうながし、二人でセメントを運んでは割れ目に流し込んだ。しまいには二人とも素手で割れ目を埋めて行った。この労役が終ったとき二人の手は赤くただれていたが、更にその手で、旅行鞄を埋めた湯舟の底に、タイルを一つ一つ丁寧に並べていったのである。

彼等の注意力は、この長い激しい労働で次第に薄れていったので、沈黙と懐中電燈の明りの下で行なわれているこの作業を、闇の中でじっと見つめているもう一人の人間がいることには、二人とも全く気がつかなかった。

ロ、名　簿

K女子アパートには、創立当時若い居住者を律するためにいろいろのこまかい規則が設けられていたが、現在では居住者が老齢となったのと同様、それらの殆んどが死文と化してしまった。しかし、そのうちの幾つかが慣例となって残っている。その第一は異性の訪問客の宿泊が絶対に認められないことであった。女性の宿泊者の場合は、単に入口の管理事務所に届ければよいことになっていた。

しかし居住者の大部分は、独身のまま年をとってしまい、孤独で交際のない生活を送って来たので、戦後は外来者の宿泊はまれなのである。

したがって、一九五一年の三月二十九日より四月一日にかけての三晩、管理事務所に記録された外来宿泊者が、五階の居住者、室番五〇二号の上田ちか子の血縁者ただ一人としても別に訝しがる必要はないのである。

その外来宿泊者は、青木泰代（三十歳）無職と記されてあった。

後に、この従妹のことが警察の問題となり、K女子アパートの二人の管理人に対して証言が求められたとき、二人の記憶は曖昧であったが、その来訪者が女性であると主張した点は同じであった。

管理人東条克子の方は、上田ちか子が最初にその従妹を伴って来たとき、受付に居たのは自分だったように思うと前置きしたあと、

「たしか、上田さんは最初、従妹さんは二週間ほど泊るのだとおっしゃったような気がします。勿論、宿泊名簿は上田さんが御自分で記入されました。その間従妹さんは窓口のところに立っておられましたが、別に挨拶した記憶はありません。服装ですが、多分、雪国から出ていらっしゃったとか云って、何となく野暮ったい恰好……そうそう赤いマフラーをかぶってましたわ。次の日からは上田さんが御一人で宿泊名簿に記入に来られました。ええ、形式だけのことですから、別に泊る本人が来る必要はないのです。でも三日ほどで上田さんは記入に来られなくなりました。その間、私は一度も従妹さんにお目にかかりません。いつ、従妹さんがアパートを出られ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com